

「ペーパーボーイ 真夏の引力」★★★★

2013（平成25）年8月4日鑑賞
 <テアトル梅田>

監督・脚本・製作：リー・ダニエルズ
 原作：ピート・デクスター『ペーパーボーイ』（集英社文庫刊）
 ジャック・ジャンセン（新聞配達員の青年）／ザック・エフロン
 シャーロット・プレス（死刑囚ヒラリーの婚約者、金髪の美女）／ニコール・キッドマン
 ウォード・ジャンセン（ジャックの兄、マイアミ・タイムズの記者）／マシュー・マコノヒー
 ヒラリー・ヴァン・ウェッター（死刑囚、シャーロットの婚約者）／ジョン・キューザック
 アニタ（黒人メイド）／メイシー・グレイ
 ヤードリー（ウォードの同僚の黒人記者）／デヴィッド・オイエロウォ
 WW・ジャンセン（小さな新聞社を営むジャックの父親）／スコット・グレン
 エレン（ジャックの父親の恋人）／ニラ・ゴードン
 タイリー（ヒラリーの伯父）／ネッド・ベラミー
 2012年・アメリカ映画・107分

配給/日活

<原作は？監督は？舞台は？主人公は？>

1995年にアメリカで発表されてセンセーショナルを巻き起こしたピート・デクスターの原作『ペーパーボーイ』を、『ブレシヤス』（09年）（『シネマールム24』24頁参照）で世界の注目を集めた黒人監督リー・ダニエルズが映画化。1969年の南部フロリダ州を舞台とした本作の主人公は、地元で小さな新聞社を営む父WW・ジャンセン（スコット・グレン）の下で、新聞配達をしている若者ジャック・ジャンセン（ザック・エフロン）。彼は将来有望な水泳の選手だったが、「ある問題」を起こしたためやむなく大学を中退し、今は実家でくすぶっていた。しかし、どうやら彼の心はまだ曲がっておらず、その目も真っ当に真実を見ようとしているらしい。また、仕事と同じように彼は家庭的にも恵まれず、母親は彼が小さい時に兄のウォード・ジャンセン（マシュー・マコノヒー）とジャックを捨てて出ていってしまったらしい。その原因は、父WWの女好きにあるようで、今彼は4人目の恋人エレン（ニラ・ゴードン）を家に入れていた。当然そんなエレンとジャックの仲は全然ダメで、ジャックが唯一人甘えられるのは、長く食事と掃除の世話をしてきた黒人メイドのアニタ（メイシー・グレイ）だけ。ジャックは今でも一人のガールフレンドもつくれていなかったから、言ってみれば彼は今風「草食系男子」の先駆け？

今年の日本は異常気象に襲われており、大阪の夏は例年以上にクワ暑い。しかし、1969年当時の南部フロリダの夏もすごく蒸し暑かったらしい。いくらアメリカが先進国だと言っても、今と違ってまだクーラーは普及していないから、パンツ一枚でゴロゴロしているジャックの姿を見ていると、汗が肌にまつわりついている様子がよくわかる。さあ、そんな若き主人公と黒人メイドのアニタの目を通して語られる、本作のエッセンスは？

<なぜ冤罪事件の再調査を？その依頼者は？>

冒頭に本作の主人公ジャックの「自己紹介」がされた後、今は大手新聞社マイアミ・タイムズに勤めている兄ウォードと、その同僚の黒人記者ヤードリー（デヴィッド・オイエロウォ）の2人が、4年前の1965年にモート郡で起きた殺人事件と、それによって死刑囚とされたヒラリー・ヴァン・ウェッター（ジョン・キューザック）という男を再調査するために地元に戻ってくる、という本作のテーマが示される。殺されたのは人種差別主義者の太っちょの保安官。彼は刃物でメッタ刺しにされて死亡したが、ウォードはこの裁判が不正な状況下で行われたため、その犯人とされたヒラリーは冤罪の被害者ではないかと睨んでいたわけだ。もっとも、ウォードがそんな再調査をすることになったのは、ヒラリーの婚約者だという女性シャーロット・プレス（ニコール・キッドマン）の依頼によるものだった。

自殺願望のある死刑囚と、夫の浮気に絶望する主婦の奇妙で温かい関係を描いた映画にキム・ギドク監督の『プレス（息／BREATH）』（07年）（『シネマールム19』61頁参照）があった。また、死刑囚との面会を描いた映画には、『真幸くあらば』（09年）（『シネマールム24』161頁参照）、『接吻』（06年）（『シネマールム20』126頁参照）、『私たちの幸せな時間』（06年）（『シネマールム13』99頁参照）等の名作がある。さらに冤罪をテーマとした名作には『ザ・ハリケーン』（99年）（『シネマールム1』41頁参照）、『ライフ・オブ・デビッド・ゲイル』（03年）（『シネマールム3』169頁参照）等がある。しかし、ニコール・キッドマン扮するパービー人形のような金髪の美女シャーロットは、獄中の死刑囚ヒラリーと何度か手紙の交換をしただけでたまちま意気投合し、一度も会うことのないまま婚約したというから、いかにも奇妙。本作のストーリー形成のポイントになるこの金髪の美女シャーロットは、なぜヒラリーの婚約者に？そしてまた、なぜ4年前の殺人事件の再調査をウォードらに依頼したの？

<さまざまな映画のエッセンスが、ギューツと！>

前述のように死刑囚との面会や冤罪事件をテーマにした名作はたくさんあるが、アメリカ南部、黒人の人種差別、殺人事件、冤罪とくれば、弁護士兼映画評論家の私としては陪審映画の傑作である『アラバマ物語』（62年）を思い出す。また、南部のまちの「お屋敷」に勤めるメイドといえば、『風と共に去りぬ』（39年）でスカーレット・オハラの世界を語っていた太っちょの黒人メイド・ミーを思い出す。

他方、大学を中退し、自分の前途に不安を持ったまま悶々とした日々を送っている青年ジャックと、その目の前に突然現われて魅力をふりまく年増女という設定は、『卒業』（67年）そのものだ。さらに、冤罪事件を懸念に調べているウォードの姿を見ていると、イメージは正反対ながらマシュー・マコノヒーが高級車リンカーンを「動く法律事務所」としているチョイ悪のカッコいい弁護士役を演じた『リンカーン弁護士』（11年）（『シネマールム29』178頁参照）を重ね合わせてしまう。

このように、1969年という日本でもアメリカでも学生運動が高揚した時代のアメリカ南部のまちフロリダを舞台とし、人種差別、裁判、冤罪を大きなテーマとしたうえ、キャラの濃い魅力的な人物を登場させた本作は、さまざまな映画のエッセンスがギューツと！

<ニコールのすごい「艶技」にビックリその1！>

ポール・バーホーベン監督の『氷の微笑』（92年）では、マイケル・ダグラスが刑事役で、妖艶な魅力をふりまく女流作家に扮するシャロン・ストーンを殺人罪の被疑者として尋問する時の彼女が、下着をつけているのが、いないのがわからない状態でさかんに足を組みかえるシーンが大問題となった。約20年前のそんなシーンを男性の映画ファンなら誰でも覚えているはずだが、本作のやっとの思いで実現できた刑務所内でのヒラリーとの面会の場面で、ヒラリーとシャーロットがみせるシーンはそれ以上のあつと驚くものだ。看守から「物理的に触れ合うことは厳禁！」と宣言されたものの、2人は至近距離で向き合って座っているのだから、互いに身体を動かしたり目や口や耳を最大限活用することは自由。そこで、シャーロットに対して「足を開け」「パンストを破れ」と「命令」したヒラリーはさらにそれ以上の行為の要求をしたが、何とシャーロットは嬉々としてそれに応じ、媚態をさらしていったから、同席しているジャックやウォード、ヤードリーたちは唖然。ヒラリーは久しぶりに（肉体的に）大満足だっただろうが、若いジャックがこんな場面を目撃して吐き気を催してしまったのは当然だろう。

しかし、あの年頃の男の性的欲望は単純で、それでもシャーロットに対する憧れ（=性的欲望）は全く消えなかったからすごい。日本でも全盛期を過ぎた女優が急に全裸ヘアヌードで復活というパターンはあるが、今なおハリウッドビューティとして第一線で活躍している私の大好きなニコール・キッドマンが、シャロン・ストーンを超えるこんな「艶技」を見事にやり遂げたことに、まずはビックリ。

<ニコールのすごい「艶技」にビックリその2！その3！>

愛媛県・松山生まれの私は、電車で30分も乗れば立派な海水浴場があったから、小・中学生時代の夏休みは何度も海水浴に出かけていた。その当時の「教訓」として「お盆以降は海にクラゲが出るから泳いでダメ」と厳命されていたが、クラゲに刺されて今にも死にそうになるジャックの姿を見ると、あらためてその教訓を思い出すことに。

シャーロットと並んで砂浜に寝そべり、こちらをチラホラ盗み見している水着姿の3人の美女たちがいれば、自然に何らかの男女の接触ができるのが普通だが、「失踪してしまった母親」というトラウマにとらわれているジャックにはそれができないらしい。そんな、ジャックの女に対する情けないスタンスをシャーロットからからかわれたと思ったジャックは、一人海に走り廻り泳ぎ始めたのだが、水泳の選手だったはずのジャックの泳ぎがへん。溺れそうになりながら何とか浜辺まで戻ってきたものの、そこでバタンキューと倒れてしまったから、さあ大変だ。そこに駆けつけてきた3人の美女の1人が、「クラゲに刺された場合の緊急治療にはおしっこをかけるのが一番」という奇妙な提案をしたが、真顔にして私はそんな治療方法は知らない。しかし、その後スクリーン上で展開されるジャックへの治療法は・・・？「ファック・ユー！」は英語の上品な言葉の代表として誰でも知っているが、ここでハリウッドビューティが堂々と口にする下品な言葉や、ちょっと考えられない放尿シーンがビックリその2！だ。

ちなみに、本作前半から中盤にかけてはニコール・キッドマン扮する金髪の美女シャーロットは、過剰な色気をふりまくだけで、現実には「本番」は見せてくれない。しかし、後半からクライマックスにかけては、出所してきたヒラリーとの間でこれでもか、これでもかという激しいファックシーンが展開されるので、これがニコール・キッドマンのすごい「艶技」にビックリその3！だ。

<ブアホワイトとは？スワンプとは？>

本作はリー・ダニエルズという、『ブレシヤス』で注目された黒人監督の第3作目。したがって、本作では南部、人種差別、冤罪というキーワードの他、本作を観るまで全く知らなかったブアホワイトやスワンプさらにスパニッシュモスなどの本作特有の概念が登場するので、それにも注目したい。詳しくは、プレスシートにある青山南氏の「『ペーパーボーイ 真夏の引力』を味わうための5つの言葉」を勉強してもらいたい。そして、「ブアホワイト」とは、貧しい生活を強いられる恵まれない白人のこと。そして、「スワンプ」は南部でしか見られない奇妙な植物のことだ。日本には昔から部落問題（同和問題）がある。島崎藤村の『破戒』はそれをテーマとした小説だが、ブアホワイトはその部落問題と似たようなもの・・・？本作を観ていると何となくそんな感じがするが、それは私だけの勝手な印象かも・・・。本作ではそんなスワンプに住むタイリー（ネッド・ベラミー）が、ブアホワイトの代表らしい。

ヒラリーの伯父にあたるタイリーは、沼地の奥地でワニを捕りながら原始人のような生活を大家族で営んでいる。ジャックとウォードがはじめてタイリーのそんな家を訪問するシーケンスは、何とも不気味だ。ジャックとウォードが人里離れた沼地に住むタイリーの家を訪れたのはヒラリーとの3度目の面会でやっと引き出した重要な「アリバイ」証言を裏付けるため。つまり、殺人事件当日の夜、ヒラリーが伯父のタイリーとともにゴルフ場に忍び込んで芝生を盗んだという供述が事実だとしたら、ヒラリーには立派なアリバイが成立するわけだ。タイリーは当初ジャックとウォードを「招かれざる客」とみなして威圧的だったが、しばらく考えた後の回答は・・・？本作では私が多分ハリウッド映画ではじめて見る、そんなアメリカ南部特有の風景であるブアホワイトとスワンプに注目！

<イギリス生まれの黒人？黒人の新聞記者？>

ジャックとウォードの父親WWは保守的な南部人だから、ウォードが同僚として黒人の新聞記者ヤードリーを連れてきたことにビックリ。それはジャックもシャーロットも同じだが、そんな「困惑」に対して、ヤードリーは「イギリス生まれの黒人」と自己紹介。しかし、イギリス生まれの黒人ってホントにいるの？もちろん、そんな黒人がいても不思議ではないし、リンカーン大統領による奴隷解放宣言から既に100年近く経っているのだから、黒人の新聞記者がいてもおかしくない。しかし、ハリウッド俳優として有名になるについて、シドニー・ポワチエがいかにか苦労したが、また黒人の世界ヘビー級チャンピオンとして君臨するのにモハメド・アリがどれだけ苦労したかを考えると、ヤードリーが大手新聞社マイアミ・タイムズの記者になるについては、きっと涙ぐましい努力をしたのだろう。誰でもそう思うのが当然だが、ヤードリーは自信たっぷりの言動ながら、どこかに怪しげな雰囲気も・・・。

そのヤードリーは、ジャックとウォードがタイリーの沼地を訪れていた時は、シャーロットと2人でゴルフ場の方の取材に向かっていた。その取材の結果、タイリーの供述に信憑性があり、ヒラリーにはアリバイが成立、よって、ヒラリーはシロ、という結論に至ったらしい。しかし、この取材から戻ってきた時の2人の雰囲気はかなりへん。ジャックの目には、こりゃ男女関係が成立したのでは、と映ったが、さて真相は？

<記事の裏付けは？さらに突っ込むと・・・>

ここまで取材を進み、「ヒラリーはシロ」という心証を得れば、ウォードとヤードリーはそれをマイアミ・タイムズの記事にすればいいだけ。しかし、新聞記者魂に忠実な（？）ウォードは、よっとしてシャーロットがヒラリーに有利な心証を持たせるため、ヤードリーと肉関係を持ってヤードリーをたぶらかしたのでは？と疑っていた。そこで、ヤードリーがマイアミ・タイムズの本社に戻った後もウォードはジャックと共に裏付け調査を続けたが、ある日バーで飲んでいたところ、2人組の黒人とトラブルになった挙げ句、大変な目に。

去る7月17日のNHKの報道によれば、イギリス議会では「同性愛」を認める法案を可決したというニュースが流れた。なお、アメリカでは既に2013年6月に合衆国最高裁判所は、同性婚が認められる州内において、同性婚のカップルに異性婚のカップルと同等の権利を認める判決を下している。このように、アメリカでは「同性婚」とまでいなくても、日本以上にゲイやホモの世界がさかんだ。しかるどころ、そうでなくてもさまざまなテーマがギューツと凝縮されている本作に、リー・ダニエルズ監督がさらに「白人と黒人とのゲイ」というテーマまでぶち込んでいるからすごい。本作ではニコール・キッドマンの「艶技」もすごいが、『リンカーン弁護士』でカッコいい弁護士役を演じたマシュー・マコノヒーが、本作後半では何ともすごい「艶技」(?)を・・・。

<「真夏の方程式」も良かったが、「真夏の引力」とは？>

東野圭吾の『ガリレオ』シリーズで福山雅治が主演した『真夏の方程式』（13年）は、方程式のテーマが数字ではなく人間の性や人間の営みだったから、数学の方程式は苦手な私でも興味深くその「解」を求めていくことができた。その方程式を解くカギが美しい自然の残る玻璃ヶ浦の真夏の海だったが、さて本作邦題のサブタイトルである「真夏の引力」とは？

美女がすべての男に対して「引力」を持っているのは、古今東西を問わず世の中の法則。したがって、草食系男子の典型のようなジャックの目の前に突然現われた金髪の美女シャーロットが、ジャックに対して強力な「引力」を示したのは当然・・・。ところが、女に対してあくまで引っ込み思案なジャックは、ウォードやヤードリーが調査の拠点としたガレージ内でも、あるいは美しい浜辺でもシャーロットに対して全く手を出さなかった。ところがシャーロットはどうもヤードリーに対してちょっぴりを出していたようだから、ジャックはイライラ。さらに、ずっとこれまで誇りとし、尊敬していた兄のウォードが黒人専門のゲイということがわかると、ジャックは大ショック。そして、今やウォードは瀕死の重傷を負わされて病院のベッドに寝たままだから、一人鬱憤のはけ口を求めているジャックの「真夏の引力」は、さてどこに？

『卒業』における、大学を卒業したばかりの前途有望な青年ベンジャミンを演じたダスティン・ホフマンと、それを誘惑する年増女ミセス・ロビンソンを演じたアン・バンクロフトとのベッドシーンは今なお強くこの目に焼き付いているが、今やと結ばれることになったジャックとシャーロットとのベッドシーンは？昔はこれを「筆下ろし」という言葉で表現していたが、さてジャックは筆下ろしを体験したことによってやっとな立派な大人に・・・？

<ヒラリーは釈放！これにて、めでたし、めでたし？>

本作は本格的な法廷サスペンスではないから、法廷シーンはないし、なぜヒラリーが釈放されることになったのかについての理論的な説明もない。しかし、この結論にはきつとマイアミ・タイムズの記者として、ヤードリーが（単独で）書いた「ヒラリー冤罪説」の記事が役立ったはずだ。「ヒラリー釈放」のニュースを聞けば、シャーロットから再調査の依頼を受けてそれをやり遂げたウォードは大いに満足すべきだが、本作ラストからクライマックスにかけては、意外にそうではなかったことが明らかになるからそれに注目！

ヒラリーは、釈放されるや否やすぐに婚約者であるシャーロットを迎えにやってきたが、ヒラリーの帰る先は、タイラーが住んでいるあの沼地。しかし、そんな沼地に住み、ワニを捕って生活するブアホワイトの生活をシャーロットが嫌がったのは当然だ。そしてヒラリーの釈放が決まった今、シャーロットが獄中にある死刑囚ヒラリーとの文通の中で、なぜ婚約材めたの？なぜその冤罪を晴らすべく再調査をウォードに依頼したの？それをあらためて考える必要がある。プレスシートにある石津文子氏のエッセイ「それぞれの宿命を演じた切ったキャストたちの引力」の分析によれば、シャーロットが本気で「ヒラリー自身を愛しているのではなく、自分が危ない男を救い出す聖母となることを夢見ている」と書かれているが、さてあなたの分析は？

<クライマックスは意外な展開に！>

シャーロットは、ヒラリーの婚約者として進行されるように沼地に入り込んで、生活していたが、今日はジャックとウォードの父親WWが正式にエレンを妻として迎え入れる日。ジャックは何よりもそこにシャーロットが出席してくることを願っていたが、さてシャーロットは？この結婚式を契機として、ジャックが唯一人心を許せる相手だった黒人メイドのアニタもクビになってしまうらしいから、ここにシャーロットが登場してくれなかつたらジャックの心はきつとボロボロに。それにもかかわらず、シャーロットはやってこなかった。そこで、こりゃ自分でシャーロットを迎えに行くしかない。若いジャックがそう考えたのは仕方ないところだ。もちろん、兄のウォードはそれを引き止めようとしたが、ジャックはすごい剣幕で一人でも沼地へ行こうとしたからウォードは仕方なくジャックに付き添うことに。

前回の「訪問」と違って今回小舟を利用したのは賢明だったが、ヒラリーの家の前でジャックが「シャーロットを出せ」と大声で怒鳴ったのはいかがなもの？だって、いくらシャーロットに来てもらいたいと願っても、今シャーロットはヒラリーの婚約者（妻？）として一緒にここで生活しているのだから、ジャックがそれを連れ出す権利などどこにもないわけだ。家の前に出てきたヒラリーに対して、ジャックは「カブつても連れて行く！」と息巻いたが、それに対してワニを切る刀を手に持って対峙したヒラリーは？さあ、このクライマックスに見る意外な展開は、ここでは書かない方がいいだろう。

ここで、面白いのは、沼地での「攻防」に水泳の選手を目指していたジャックの泳ぎの技術が大いに役立ったことだ。太っちょの保安官殺しの犯人は、やっぱりヒラリー？冤罪の濡れ衣を晴らすことができた、と思ったのは錯覚？ヒラリーの釈放後ヒラリーと一緒に生活していたシャーロットの運命は？そして、ジャックに付き添ってヒラリーの家まで出向いたウォードの運命は？実に盛りだくさん、そしてキヤラクター豊かな登場人物たちが演ずる波乱万丈なクライマックスの展開は、あなた自身の目でじっくりと楽しんでほしい。